3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎松原千晶さん（きらら女川　所長）

行き場がなくやる事がないのは本当に辛い。利用者を放っておく訳にはいかなかった。

― 復興が進む女川町 ―

― 新設第一号の建物となった「きらら女川」 ―

事業所再建

事業所と稼働予定だった新拠点が津波で被災。事業再開までには２年を要した。

2010年12月に開所し、「おからかりんとう」等の製造をしていた障害者就労継続支援B型事業所「きらら女川」。地震当日は、事業拡大のため改修した新拠点への引っ越しの日でした。沿岸部にあった「きらら女川」は、これまで利用者が作業していた事業所も、引っ越し先の新拠点も、その日のうちに津波で失ってしまいました。

事業所の所長である松原さんは、その日から3週間は利用者の安否確認に費やしました。事業所が流失した当時、事業の再開は不透明な状態だったといいます。再開には事業所が必要でしたが、女川地区は土地の8割が山林、2割が被災した住宅地のため、事業所を建てる土地が見つからなかったからです。「利用者には『いつかまた再開するよ、いつになるか分からないけれど、それに向かって頑張ります』と言うしかなかった」と松原さん。事業所を再建したのはそれから2年後でしたが、その建物は、女川町で震災後に新設された建物第一号だったといいます。「我々ができることをしないのは利用者を“見捨てる”ということになりますが、そういう思いはどこにもありませんでした。本当に事業所が再建できるか分からなかったけど、やってみなくちゃと。たまたま実現できたことなのかもしれないけれど、再建を目指して小さなことを積み重ねた結果、今につながっていると感じます」。本当にできるかどうか分からない、でも諦めたくない。気持ちは揺れ動きながらも、それでも行動し続けた松原さんたち職員の奮闘が、事業所再建という形になって結実しました。

意識格差

急きょ作業を依頼した鳥取の利用者と被災地の利用者、その意識の格差が明確に。

震災当時、「きらら女川」が製造する「おからかりんとう」は全国に販売網があり、松原さんは軌道に乗った商品の供給を継続したいと考えていました。そこで、「きらら女川」の立ち上げのため松原さんが鳥取県の事業所から派遣されたという経緯から、「おからかりんとう」の製造作業場を急きょ鳥取県に開くことにしました。しかし、急に作業が増えた鳥取県の事業所では、利用者から「忙しすぎる」などの不満が出るようになりました。「被災地では利用者は行き場がなく、何もすることがない。でも鳥取では仕事が山ほどあるんです。そのギャップにすごく苦しみました」。当時、利用者は事業所という拠り所をなくし、自宅にいるだけのつらい日々を送っていました。しかしだからこそ、事業所が再開されることを強く望み、作業する日をずっと待っていました。その経験があるからこそ、今、「きらら女川」の利用者は希望に満ちた表情で作業に取り組んでいます。「利用者はいくら忙しくても『忙しい』という人はまずいません。『死ぬまで働きたい』、そんな思いを持っていると思います」。

松原さんは、今後も「きらら女川」が良い形で継続することを望んでいます。「職員がお金を生み出すことに携わり、利用者にきちっと賃金を払えること。職員は、何を作り誰に売ってそのお金をどう使うのか…民間企業では当たり前の感覚を養うこと。加えて、職員は利用者のスキルを上げる努力を惜しんではいけません。その気持ちを持って、今後も事業を続けていきたいです」。